

## アウトブレイク **Outbreak**

適切な訳語はないが、「突然の疾病・疫病の発生」くらいだろうか。よく似た言葉に **Breakthrough** ブレイクスルー感染がある。今回のコロナ感染症でいえば、ワクチンを 2 回接種したあとに武漢肺炎に感染することを言う。「天井を突き抜ける、あるいは壁を突き破る」などの感じが適切だろう。

**Outbreak** は、1995 年のアメリカ映画の題名である。ある町全体にアフリカ・ザイール原産のサルから集団感染したもので、人間が森を狭くしたために天罰がくだったものだ、とまじない師は言う。致死率は 100% で、エボラ出血熱がモデルらしい。エボラ出血熱は、接触感染で、致死率が 90% くらいで、10 人のうち 1 人くらいは助かる。この治った人の血清を取り出して治療に使うのであるが、この映画では、これと在郷軍人病と合併して新たな 100% 致死率の疾病を想定しているらしい。……「在郷軍人」は現在日本にはいないから、理解できない医師がふえたために、わざわざレジオネラ病 **Legionnaire disease** と覚えにくい名前にしてしまった。わずか 70 年前には存在していたのだから、在郷軍人の名前を消す必要がないのに。戦争の記憶そのもの、つまり歴史的事実までを抹殺しようとする勢力があるらしい。要するに 1980 年代初頭に、米国の在郷軍人の集会で、宿泊していた人々がホテルの空調からの空気を介して感染した肺炎で、新たに発見された小型の細菌が病原菌である。（この時には大騒ぎになった。）この物語は、ウィルスが進化して、空気感染（**Air born**）化するようになった想定である。24～72 時間以内に 100% 死亡する。

事実かどうかは別にして、生物兵器・細菌兵器（**Biological weapon**）は、「弱者の核」といわれるようだが、実際には米国やロシア、中国など、核を持っているながらも開発に余念がないのが実情である。中国の生物兵器が、事故か故意か、武漢市内にもれだした、と米国が言うのも無理はない。たとえば、**SARS** のときのコロナウィルスを保存していたものに、遺伝子操作でいろいろな性質を付与させてより「悪性化」させたものかもしれない。

この映画では、事実かどうか別にして、米国が 30 年前に流行していたエボラ出血熱のウィルスを保存していて、治療用の血清も保管していたのに、一般市民に発病者がでたとき、それを使わせなかったこと、さらに生物兵器を隠蔽するために 2600 人の無辜の人々が住んでいる町を消滅させることに主人公ダニエルズ陸軍軍医大佐と重要な脇役のソルト少佐（この少佐がヘリコプターのパイロットである）が憤り、ザイールから密輸入されたサルが同じウィルスを持っているはずだと考え、さらには、このサルがもつウィルスが空気感染するように「進化」したものと考え、このサルを探し出して血清療法に利用しようとするものである。

米国は、大都会はともかく、田舎にできれば、概ね 100 km ごとに町が点在し、長距離トラックや、旅行者の便宜のためにホテルやコンビニが存在する。だから特殊な爆弾の使用が可能になる。100km の間には何もなく、ただ道路だけがある。

中国共産党は、無論否定するけれども、共産党公認の女性科学者の論文で、「人類がふつうのコウモリやハクビシン、蜥蜴など、あらゆるものを食用にするからだ」、と述べさせているが、ふつうの人類、たとえば日本や米国、欧州人などは、そんなものは食べない。特殊な地域の人々の主要な蛋白源にはなっているだろうが。中国と国境を接するベトナム人たちは、奇妙な生物を物々交換するときには持参するという。その理由は、「やつらは、変な生き物ばかりを要求するのだ」と言っているという。(高山正之氏)

新型コロナ（武漢肺炎）がパンデミックになったのは、WHO（世界保健機関）の対応の遅れにある。日本でも、専門家と称する連中は、当初、「人に感染する証拠がない」など、ノー天気なことを語っていたのだ。WHO の事務局長は、エチオピア人で、エチオピアは経済を中国共産党に依存しているから、これに異議を唱えることができない。かくして、武漢肺炎は世界中を席卷し、さらなる犠牲者を要求している。武漢の人口や豪華客船の客の人数を凌駕してしまう可能性だってある。

Outbreak では、2600 人の町を消滅させるべく、軍主導で、そういうものはなかったことにしてしまう計画だった。すべては、生物兵器のためである。

生物兵器のために町を消滅させるのには、大佐と少佐も憤りを隠さず、カー・チェイスならぬヘリコプター・チェイスでホスト（宿主）のサルを被害のあった町に運ぼうとする。……ここには、当然ながら、隠蔽しようとする者と表に出そうとするものとの葛藤がある。大佐らは、軍司令官らのヘリに銃撃されながら、危うく脱出に成功する。そして Host（宿主）のサルを見つけ出し、血清をつくってこの町の住人を助けようとする。……この時点では、町を消滅させるための爆撃機は出発している。

爆撃機のパイロットに向かって、准将が語りかける。

「任務に胸が痛むのは当然だ。だが、**米国と世界の命運がかかっているのだ！最後の防衛線だ！心して重荷を背負ってくれ。**」 神よ、許したまえ！とも。

その直後に主人公から、ホストを確保した報告をうける。すぐに爆撃機のパイロットに中止を命じる。そして発病者のいる町に向かう主人公に「邪魔をする者がいる」ことに注意を喚起する。一方、司令官は、自らヘリコプターに乗り込み、主人公の乗るヘリコプターを撃墜しようとするなど、さまざまな妨害をする。それが上に述べたヘリコプター・チェイスである。大佐はいったん被害のあった町に降り立ち、血清をつくることに専念するが、爆撃機の接近に対し再びヘリコプターに乗って、爆撃機のパイロットに生物兵器のことも語り、爆撃を阻止しよ

うとする。命懸けで爆撃機を阻止するため、この町と治癒可能な血清を守るために、爆撃機と衝突する覚悟で進路に立ちふさがり、ニアミスをおこす。爆撃機のパイロットは、この時点で大佐らの言っていることに納得し、命令に背き、太平洋に爆弾を投下する。ここがクライマックスで、大佐も少佐も涙をうかべながら感謝するところがいい。

爆撃機のパイロットたちは、命懸けで自分たちに向かってくるヘリコプターで真実を知り、町の消滅を回避したのである。主人公は、准将とは20年来の友人であり、主人公の大佐の上役にあたる。この准将に向かって、「**保身のために他人を殺すな！・・・・・・真実を隠して国家を操れば、町だけではなく、アメリカの魂も失うぞ！**」この言葉が決め手になって、隠蔽しようとしていた司令官は解任され、町は消滅することなく、再び人々の行きかう穏やかな町にもどる、という物語である。

この映画を見るたびに思うことがある。武漢肺炎に対し、中国共産党に、もしこの映画の主人公のような勇気があったなら、あるいは命を賭けてこの肺炎に対し、強く警告を発した医師の勧告に忠実であったなら（つまり、勧告は抹殺した。）、また、WHO がもっと迅速な対処をしていたなら、ここまで悲惨な事態にはならなかったであろうと思うとき、今後も変化を遂げながらしぶとく生き残りを画策するウィルスを過去のものにしていただろうと考える。まったく終焉がみえない現時点で何を言っても歴史に「もし」はないけれど、また違った形になっていただろうと思う。

ボクが今思っていることは、さいわい、若者や幼児にはほとんど重症化する者がいないことである。ひとりのアホウのために現在の世界中の若者や若い少年・少女たちに、われわれの負の遺産を決して遺してはいけない！これは、声高らかに発信すべきだろう。

この映画の見どころはいくつもあるが、白人と黒人との差別がない。准将は黒人だし、ソルト少佐も黒人である。准将は名優 **Morgan Freeman**、大佐は **Dustin Hoffman** である。

この映画の初めに、ノーベル賞を受けた **Joshua Lederberg** の言葉がでてくる。

**The single biggest threat to man's continued dominance on the planet is the virus .**

（人類の地球上での優位を揺るがす最大の脅威はウィルスだ。）

現に、新しいタイプの新型コロナウイルスが新たに次々と出現しているではないか。

この話には後日談があつて、ちょっと楽しいし、嬉しい。

この映画の話を、ある高校で話させてもらったことがある。「医者になるためには、どうすればいいのか」が主題である。この学年の半分かな、100人か150人か話を聞きに来た。

この映画のことなど、無駄話ものことも入れて1時間以上話をさせてもらって、医学の限界を知らせ、そうなったときには、社交するしかない、などという結論に導いたのである。もっとも受けたのが何だと思いますか？

じつは、「おすぎとピーコ」のピーコのものまねでした。「ちょっとこの人たち、自分の全身、鏡で見たことないのかしら?!」 少なくとも、教室の5~6か所から「エッ? エエッ?! エー?」という女の子の声が聞こえました。自分が言うのもなんですが、これがまた、初めてとは思えないくらい、よう似てたんですわ。

後で聞いた話だが、「やっぱりオレ頑張って医者になりたい」と語った生徒が何人かでてきたそうです。今そうになっている人がいたなら、もっと嬉しい。

2021. 11. 30.